

気がつけば、この道40年

光高校女子部監督 佐補益子

◆第1回 ～ 光高19年目の中国優勝 ～

光高チームを率いて19年目の早春、松江での中国地区高校選抜大会で、市立広島商業、倉吉北、広島皆実、倉敷翠松を破り初優勝を味わいました。当然、中国ブロック制覇は初めてのことでした。

これまでに、県内の上位チームが何度か栄冠を獲得された光景を見ながら、山口県関係者として拍手を送ってきましたが、今回自チームがその立場に立ち、皆様から祝福していただき、誠に嬉しくこの優勝を受け止めています。

本大会は、山口県2位の出場となり、新人戦での力不足を深く反省しての松江行となりました。県の新人大会後の多少の時間を使って、弱点を補い、腰を据え直しての中国大会出場でした。特にチームのメンタルな面の指導と、継続的に築き上げてきた守備力の更なる向上をチームに求めました。

対戦相手チームの注目すべき戦力に対し、いろいろの角度から分析しなければなりません。自チームの戦力向上として、チームの和と連携による手堅い防御から一丸となって繰り出す速攻を、常に要求しています。ディフェンスを頑張らせて、オフェンスにつなげるという考え方は、高校生のチームとして、当然のことですが、もっとも大切な指導だと考えています。

昨年度、どの大会も2位どまりで、県決勝、中国ブロック決勝も再度にわたって、三田尻女子高校に苦杯を舐め、指導者としても大きな教訓を与えられた1年でした。

チビっ子光高チームが定評だった小兵チームから、大型選手が加わり、これからだと勢い込んだのですが、今思えば、まず要の長身選手の体力作りができていなく、技量も低かったこと、また、長身選手を使いこなす周りの選手養成が今一步足りなかったことが、苦戦の原因でした。

殊に、R・G役の養成には、中村コーチも本人の得意なポジションであるだけに、しっかり教え込みたいところでした。現時点で、多くの対外試合を経験させながら、達成の喜びを一つ一つ財産にさせ、育てているところです。

私事ですが、昭和49年5月島根での中国大会初出場から20年目を迎えることになります。

出場権を獲得して帰校すると、当時の体育主任（兼運動部長）から、「佐浦さん、これが初めの終わりになるかもしれないから、まあ、頑張りなさい。」と言われました。ちょうど家の中では、小学校5年と2年の2児を抱え、80代の老父も少しずつ介護が要る頃で、家庭人としても、大変厳しい頃でした。だから、私にとって、この言葉はいろいろな意味に取れるものでした。

しかし、負けん気の強い性格と、教職生活も多少のことはこなせる年代でしたから、この言葉は私をかえって奮発させるものでした。

その中回大会では、一回戦、岡山県の就実高校と対戦しました。前半はリード気味に進めたゲームでしたが、後半の勝負所であっけなく敗退しました。この気持ちの整理の着かない緒戦敗退によって、絶対に

次年度にもう一度出場するんだと決意を固めて学校に帰りました。

この大会で早稲女子チームが初優勝され、故中川監督の采配ぶりが、今も脳裏に浮かんできます。

こうしたチームの好機をつかんで、私のチーム作りが始まったのですが、この時投げかけられた先ほどの言葉が、私を奮いたたせ続けたことは確かだと思います。

今こうして振り返ってみると、本当に多くの皆様に激励と支援をしていただき、何とかここまでこれたというのが素直な実感です。あるときは学校あげて、限りない応援をしていただきました。弱小チームになったときも、常に物心両面からの温かい支援を続けていただいた同窓会長の藤本竹登氏に感謝の言葉もありません。

どんな苦境に立ったときも、情熱だけは消さないで続けることができたのも、皆様方から影のお力を貸していただいた結果です。

こういう私の歩みは、皆様方の参考にはならないかと思います。しかし、山口県バスケットボール協会が、やっと発足軌道に乗った、昭和20年代末から30年代の黎明期に高校時代を送り、その後バスケットボールとの縁を切ることなく、長く高校教育に携わった私の歩みは、そのまま戦後の山口県女子バスケットボールの球史と軌を一にしていると思います。

これから何度か連載させていただく、一女子指導者の思い出話を、楽しみに読んで戴けたら幸せこの上ないと思っております。

さて、他の指導者と比べ、回り道を何度もして長い時間をかけましたが、昭和61年インターハイ頃から、若い青年教師との出会いの中、新鮮なバスケットボールをチームに常に加えてもらいながら、チーム作り努めてこれたことに感謝しております。

2代目の青年教師、中村浩正コーチの技術指導と、私のこれまでの体験の中から生かしたチーム作りの方法で、どこまでも光高校は挑戦者チームとして頑張りたいと思っております。

今後とも、ご指導ご助言の程よろしく願いいたします。

◆第2回

高校入学して間なしに、体育の授業でスポーツテストが計画されており、ソフトボール投げと50m走があった。この授業の直後、サングラスをかけた中年の体育教師から、今日の放課後残しておくようにと言われた。少々こわい感もするベテラン教師のお声がかかりで、体育館（当時、講堂を改良して片面だけリングがつけられていた）へ案内され、バスケットボール部の練習の見学をさせられた。いとも簡単にランニングシュートが連続リングに入っていく。この光景が今でも印象的で、強く引きこまれるほど魅力を感じてしまった。そして、上級生の中に中学時代（習成中→現・平生中）から見上げていた先輩が3名目にとまった。こうしたことが入部の動機となり、翌日から予期しなかった高校生活の始まりとなった。

中学時代はバレー部へ一時席をおいていたり、卓球部に気まぐれ入部をして、しばらく必死になった程度でした。運動部のめざましい活躍を人ごとのように絶賛していた一人でした。そんな私に、先のサングラスの体育教師との出会いがここまでバスケットボールとかかわることになった訳です。

さかのぼれば、第5回名古屋国体、第6回広島国体と連続出場の熊毛南チームの監督、サングラスの谷

馨先生です。(現・田布施町在住)第6回大会では、時の強豪チーム、お茶の水女子チームを倒してベスト4という輝かしい栄光のあとを山口県のバスケット球史に残された大監督です。この実績は入部してしばらくした頃、数名の卒業生が来校され、さりげなく紹介方々説明されたけど、私にとっては日ごとに凄いチームに入部したことを悟ることになった。今さらながら、「えらいことになった」「知らなかった!・・・」「退部するなら今だ・・・」と胸の中はさわいだことを今でも思い出します。先輩等の恵まれた体型と美人揃いだったことなど、私にとっては、とてもとても見劣りをする自分だったこと、しかも中学時代の未経験さは穏やかに受け止められない状態で、本格的困惑が始まったのはその日からでした。

そんな時、山口大学の学生だった旧姓長迫コーチ(現・岩国工業高校、松本理監督の実父)が卒論を書きながら、放課後の指導に通っていただいたことは、初心者の私にとっては、マンツーマン指導を受けることのできる絶好の機会でした。ボールの持ち方、スナップの効かし方から教わることができたことは、近道で効率のある練習メニューを組み、育ててもらった訳です。今日、指導的立場を踏んでみて、適確な指導を受けたことを改めてうなずくばかりです。大会が近づくとコート上は厳しさと迫力が伝わってくるし、技量も何もない私にとって毎日があつという間に部活は終わっていくようでした。

県下の上位チームに山口、大津、長府、熊毛南が県1位を競っていました。春季県体が全国大会出場権を握る唯一のチャンスで、青木進先生(山口市堅小路在住)率いる山口高校が優勝候補のNo.1で、予定通り決勝戦での対決でした。一日、4試合目が決勝戦で、決勝戦のみ屋内コート(当時、山口大学経済学部の体育館・・・雨が屋根の上横からコート上に降ってくる、床と通風換気だけは考えてあるコート)のできる喜びは格別でした。山口高校の名センター(長尾さん、大嶺高校で教職を一時とられた)のあざやかなシュート力で接戦のあげく、敗戦の涙を流した惜戦は忘れられない一戦でした。この敗戦がキッカケで部活を継続する意志を固めた訳です。新潟インターハイ(第6回)を落としたことへの上級生の淋しい思い出は私にとって、この道の確かな出発点ともなった。決勝戦の審判(主審)は水島哲夫先生(当時、大津高校男子監督)でした。県下、日本公認審判は唯一の方でした。

当時は、インターハイ予選を落としたチームは西日本大会への出場権が与えられ、1年生ながら博多での西日本大会(S.30.1)に出場でき、佐賀高校と接戦ながら1回戦敗退でした。谷監督、旧姓長迫コーチ(松本正氏、西市高校校長、H.3退職)のお二人のスタッフで引率いただきました。この大会での見聞は、ベンチの末席ながら目標レベルのキャッチができた。

新チームへのバトンタッチで早朝30分練習、練習終了後20分ばかりかけて、バスケットボール競技の基本の徹底した個人指導が始まり、併せて当初からG役(トップG)として仕立てる予定で、ゲームのかけひき、展開の仕方、外角のシュート技術を生かしたシューター役、絶妙なパスとはなど、1対1の指導を受けた。

向う2月の新人戦(於大津高校講堂)は、初めてのスタメンG役で、くそ度胸しかなかった選手でした。何とか決勝進出まで耐えた。そして、決勝戦は対大津で、後半ラストクォーター(当時のルールはクォーター制)のところで、5ファールで3名の退場がおこり、4人で片づけたこと、フロントコートへボールを運んではバックコートへ戻ってセイフティー役に徹した決勝戦でした。ベンチの指示にすべて従っての優勝戦でした。

こうして好運にも強いチームに席を置いたことから、県外の大会を経験し、自分流に吸収、イメージトレーニングをしながらチームづくりの一員として何とか大役が果たせたことへのささやかな自信が、秋田インターハイ(S.30)出場へと結べた。長迫コーチは大学卒業後は久賀高校へ新任として教職の道に

つかれ、時を同じくして、九州の八幡中央高校から他県転任で和佐本生男先生との出会いが始まった。(S.30.4～) 和佐本先生は、九州大会で優勝経験をされている有能な監督さんであったこと、家庭の都合で転任されたことを聴き、大喜びをしたものです。

いよいよ秋田インターハイへ向けて高校2年はすべてバスケット一色の生活となった。進学のことにも気がかりながらも、学校あげてのチームづくりに受けて立つしかなかったこと、苦しい中に別の楽しみをかかえた高校生活でした。秋田インターハイでは、男子大津高校と共に出場。開会式では岡山就実が優勝カップを返還されたこと、中国勢の強さをしっかり覚えています。岡山：就実、総社、島根：安来が中国ブロックの上位を預かっていました。高校2年(S.30)の時、現中国大会リハーサル大会として県1チームで試行されたことを記憶に残している。また、S.30.4.1から山口高校が山口高校(殆ど男子)と山口中央高校に二分され、部員も2校に分かれたことは、現山口中央高校チームの出発ともなりました。こうした歴史の始まりも起こって、熊毛南時代が訪れた訳です。

3年1名で2年1年を中心にしたチームづくりも不動の力を持ってきて、いよいよインターハイ県予選(於徳山市毛利球場横の体育館)を迎え、予定通り決勝進出、相手チームは対長府。これまでの対戦内容はダブルスコアで相手を制しておきながら、決勝戦で敗退。高校3年目の夢は破れた。白松先生(元西京高校校長)の秘めたご指導は効を成し、見事に熊毛南の敗退となった。勝負に対して油断、あなどりがどれほど苦しむ結果を呼ぶものかを厳しく悟されたことが今日の私の教訓です。

◆第3回

熊毛南高のバスケットボール部員として、県1位のチームをまとめ、予定通りインターハイ出場権を獲得することは当然のこととして期待されておりながら、高校3年の神戸インターハイを落としたことが、今日の教職の道を選択することになった。

インターハイ県予選敗退後、監督・コーチ(いずれも保体科の厳しくも面倒見の良い先生)から、進学志望であろうが秋の県体、そして、西日本大会(第2位のチームに権利が与えられていた。S.31.1.4～6 於松江市)まではこの敗退の責務としてチームを立て直し、続投して頑張るよう諭された訳です。3年生5名の中、進学志望は私だけでした。秋の県体までは3年生5人でもうもう一度県体優勝を目指して夏の県予選の雪辱を・・・と個人的には少し勝手な胸算用をしていましたが、他の4人のチームメートの友情と加えて先輩と約束したことからまって、苦しい個人的立場は人生の選択にも連なっていました。一方、及ばずながら主将という立場は後輩からも私の進路は注目を受けていたことは薄々感じており、大きな岐路でした。当時学校は大学受験に対して本格的進路指導にのり出しており、進学クラスと普通クラス(就職)との区別がなされた時代です。担任とクラブ顧問と3人で私の進路案内について時間をとっていただいたことは、現在の普通高校生にも訪れて来る問題と変わりはありません。結果的には、受験1ヶ月前までバスケット部員として、夏以上に後輩(新チームづくり)を育てながら頑張った訳です。

冬休みは正月も返上で、西日本大会を目指して高校3年間は最後まで続けたことは、私のささやかな征服でした。個人的なことで(もう一つ)恐縮ですが、母のたつての念願は、私の幼少の頃から小学校教員になって欲しい、ということでした。そのために習い事をさせてくれたのに、全く別の方向に進路を決定したときは、親子の不調和音のまま、受験の運びを秘めて進めたものです。後輩の指導も兼ねて3年の

冬まで部活動と受験勉強をかかえていたものの1つには、指導的立場に魅力をもったとも言えましょう。嬉しいことに、後輩は S.3 1 鳥取インター、S.3 2 東京インターと連続出場を果たしてくれた。和佐本監督は、九州の八幡中央高校のチームを率いておられた時代を再現されたようでした。

私の卒業と同時に、監督だった谷先生は中学校の管理職として、受験のために実技（ダンス）の指導をしていただいた田中勤先生（当時野球部、陸上部顧問）は、岩国高校へとご転任され、進学後の母校訪問に淋しさを感じたものです。私の高校時代は、体育教官室の先生方からいつも声援や助言をもらって育っていたこと、今さらながら素晴らしいお出合いでした。365日指導される和佐本監督は連続インターハイ出場チームづくりに燃えておられたことは快いものでした。基本練習をしっかりとさせて、これまで以上の新技術指導に余念のない指導力、技は魅力ある若い先生でした。

卒業後山口県に戻り”一般女子チーム（山口）”の1メンバーとして国体中国ブロック予選へ出向いた――今日の”成年女子”のはじまりだったと思います。監督に故三戸雅之氏（当時山口県協会理事長）、コーチ浜本氏（山口市在住）でした。三戸杯（防府市バスケットボール協会主催）とは、故三戸雅之氏のご貢献をたたえて開催されていることを改めてご理解下さい。三戸さんと直接ご縁がありましたことを、私自身大切にしております。巨漢な身体で優しさ一杯の暖かい方でした。この方に比し、小兵な浜本コーチのシャープな御指導は記憶に残っております。

中国地区は岡山、島根がダントツに強い県でした。時は山口国体（第18回 S.3 8）に向けて、選手選考、チームづくりの準備が本格的に進められていました。（S.3 4～）選手としてのりだすか、結婚かで選択を迫られているうち、山口（山高 OG）、下関（長府 OG）を中心にしたメンバーでスタートをされ、私自身は山口国体には何の力にもなれないまま閉じました。その代わりに、主人の方が教員団チームの一員として秋田国体など出場させていただいたことは、お互いに若い頃の出来事になっています。当時のメンバーに吉村旦先生（現副理事長）、松本正先生、吉規喜代二先生、藤井貢治先生、若さいっぱいだった桑原英雄先生（宇部高）、山田隆道先生、濱村悦巳先生（県保体課長）など我が家のアルバムに残っております。只今、教員チームや成年チームでご活躍の先生方を見ていると、山口県のレベルアップを世代の交代を繰り返しながら、この30年間に支えてきたことを確かめております。この他に、既に定年退職されている中村豊継先生（元 山口県協会理事長）、藤井耿介先生、安田望先生など山口県の教育現場で大活躍された方々を忘れてはなりません。女子チームも教員チームとして結成できたのは、私共の時代からすれば、ずっと後の S.5 0年代に入ってからです。S.3 0年代の先生方は少なく、成年女子に加わることで、何とかメンバーを揃えチームづくり・・・といったところでした。今はママさんバスケットボールなんて当時からは考えられない現実に関心から嬉しい声援を送っている旧人です。

新任校の久賀高校で恩師、松本正先生と再びご縁があって、今度は教員として同席をいたしました。まもなく先生のご転任（徳山商工へ）がおこり、バスケット女子部を預かって以来30余年間、クラブ指導は続いている次第です。その間、バレー部を持ちながら（転任のため）バスケット同好会も併せて指導していた時、（上関分校）がありました。顧みれば、今日まで教職の道（久賀～柳井商～上関分校～光）をたどりながら、クラブ指導が継続できたことは恩師の高校時代の情熱あふれる指導姿勢と、私に期待された役職があったことの外、何者でもありません。これからは女子体育指導者としてダンスだけでは駄目だ、もう一つ特技を生かして指導力を発揮することだ、と言われた。高校現場に席をおいた時、女子体育人は限られた人数でした。高校時代から続いて専門種目を持って指導的立場が与えられたことはとても幸せに思っております。

毎年全国大会出場を目指して、毎夏接戦が繰り広げられるけど、夢はいつも師から与えてもらった全国大会出場です。たった一度のインターハイ出場からはじまって、この年齢までバスケットボール競技に直接かかわることのできたこと、そして、師を乗り越えた慈果を出すことが恩返しと思っています。チームづくりの壁にぶつかり、夜道を急いで和佐本監督の所へ走ったときもありました。家庭的にも、子育てあり、老いた親の介護ありで大変な時もありましたが、家族がそれぞれよく理解してくれたことに感謝しております。

以上、乏しい体験の中から書きおろしてみましたが、特に女子の指導者に当時を知っていただき、これから雑多な事に対し女性ならではの負担もかかえてこの道を極めていただくことを切望しております。

今回は、光高校における手作りチームづくりから現在を記して、皆さんの思い出話に加えていただければ幸甚にと思っています。

◆第4回 ～ 光高校手作りチーム率いて今日まで ～

光高在職21年日の冬も、厳しい一戦一戦に変わりはない。同一高でチームを率いて20余年日を迎えるなんて予想すらしなかった継続だが、一重にチーム作りの面白さにひかれ、好きな仕事に終始とくんだな！・・・としかいいようがない。

吉規先生の転任（S.48.4.下松高へ）で淋しさいっぱいの上級生と先生を慕って入部してきた新入生部員が1年間、専門の指導者を待っていたところへ迎えられたのが私でした。

初顔合わせの時とても印象的だったのは、しっかりものの名マネージャー（新日鉄男子バスケの史上に残る名マネージャー唯岡昌成）が全て部活を預かっているといった感じでさわやかに挨拶を交わしてくれたこと、昨日の事のように思えてなりません。

そして、センスのあるPG（ポイントガード）《国体成年女子で活躍した旧二十八さん》と県下随一の高さ（170cm）のC（センター）、肩の強いPF（パワーフォワード）、シュート力抜群のSG（シャドガード）《山大バスケット部で活躍、旧姓鹿松》、左利きの交代FC（フォワードセンター）と個人的能力をそれぞれ異質に持っていました。しかも生徒自ら、練習からゲームまで組み立てていく体制でやっていました。

チームの無理からぬ策ともいえますが、光高チームの指導者不在の特色あるチーム作りとも言えました。しかし、部員をガード、リードしてくれる指導官をしきりに求めていたことも伝わってきておりました。こうした状況の中に任されたので、これまでの生徒の自主性も継続させ、加えて個々の生徒の技術向上には、しっかり選手の気持ちをつかんで育成しようと思った訳です。ベスト4に何とか残りながらベスト3になれない惜戦の繰返しを切々と部員一同が述べた時、私の第一の仕事が始まった訳です。これまで上位チームに恵まれていなかった監督業が、根底から出直しと再勉強が始まった次第です。この時出会ったチームメイトこそ、私の光高チーム作りの大きな示唆をくれたと思っています。

まず、高校時代に体験したあの夢を追って握った現実を、このチームに残したいと思った。しかし県の上位チーム（当時、早稲、宇部女子、長府、萩商など）との対戦は、攻防の作戦力やベンチ・ワークにしても苦しい戦いのあげく、敗戦を味わうことの繰返しでした。毎週末の練習試合や、一日遠征の計画もほとんど実行に移したけども、チーム作りのコツ、方法は、自分流の勉強だけでは難しいことに出会いました。

卒業生が進学先で次々バスケット部で活動していたことを役立て、大学訪問を試みた。九州方面と岡

山方面、神戸方面の三ヶ所に限定して連休と長期休暇を活用した。こうして転任7年目の秋、県体初優勝（現、成年女子PG役、載内祐美子さんの時代）が訪れた。忘れられない決勝戦です。～対萩商～

そして8年目の冬、県新人戦で県制覇を達成、久々の中国大会出場権を獲得した。一回戦、出雲商業を倒し初めて中国大会二回戦進出した時は、自チームとしてのレベルアップを少々感じた訳です。二回戦の市立広商には高さとパワーを持ち合わせた実力の差を見せつけられたが、意外に善戦したことを覚えている。旧友の相田監督から、常連チームにはない光高チームとの対戦が楽ではなかったことをその後に関わされたものの、市立広商の優勝チームまでには相当の勉強が私にあることを悟った次第です。

小兵チームの苦肉の策として、オールコートマンツーマンディフェンスから、ダブルチームを仕掛ける変則ディフェンスは、一回戦は余儀なく戦えたが勝ち進むためには多彩な技術指導が求められた。この当時、しきりに私が羨ましく思ったことがあります。上位チームには複数のスタッフで、ベンチの余裕を横目で見ながら、戦略、戦術に頭をひねっていたことを懐かしく思い出しています。監督として戦力作りを見抜くことは勿論だが、ベンチワークをしきり盗んで勉強したことなど多々ありましたが、私自身の失敗を苦戦の中に救われるのは、選手の闘志力だけでした。走ること、耐えてどこまでも諦めない挑戦意欲は私の力不足を大いに補ってくれました。指導時間にも余裕のないために、選手自身がやるバスケットボールに撒した光高チームにするしかなかった。許されて望むことは、限られた生活時間の中で放課後の練習を目いっぱい指導できる時間をどんなにか求めたものです。ところがどうした幸せなのか、S.59.2.全国選抜優勝大会中国地区予選で思いがけず2位となり、東京行きの切符を握ったのです。組合せ、運に恵まれ、漁夫の利でした。

危篤状態の父を病院に預けて出発しなければならない一人監督業の厳しさは、またとない遠征でした。やがて我が家の受験生も一段落した途端、待望の放課後の指導時間が増えこのときのホッとした気持ちと、これでクラブ指導にしっかり打ち込める喜びを握りしめた気持ちは、世の男性スタッフには解せないと思います。部員39名全員を引率して初出場のメリットは何だったと思いますか？他チームの応援力や自チームの戦力レベルの差をキャッチしていたことでした。

S.60、総体県予選に向けて部員一丸となって、もう一度全国大会に出たい一念で、選手と応援団に分かれて立ち向かったことは、“光高物語”となっています。部員の綿密な計画案は、私の知らないところでそれぞれの我を心得てその役割をしっかりと果たして、届かぬ夢と思っていたことを実現へぐいぐいと近づけ、メンタルな面を生徒自身でかためてくれました。準決勝の対宇部女子戦こそ奇跡の勝利だったと思います。しかし39名の部員は、一直線まっしぐらだったと、きっぱり言い残していました。改めて、かかえている部員に救えられることの多い指導者でした。

第1マネージャー、第2マネージャー、応援リーダー、小道具係、応援団第2グループなど全て、コートの外での“とりしきり屋”が懸命に支えていた。私の負担の限界もよく解してくれていた。生徒の中にヘッドコーチ、アシスタントコーチ役が決まっており、特に普通高校のクラブ活動を、生徒の力をしきりに活用して運営していた。この時代の卒業生は、今日の光高チーム作りの起点を解して、少々注文をくれます。ここでチーム作りの大きな仕事、戦力作りは“素材ある選手集めをしなくては、全国大会一回戦トリプルスコアの繰返しで閉じる”という苦い体験から、中・高の連絡を密にして選手作りのにり出した。まず市内4チームに出入りしていただき、中学生指導に力を貸した。また夏休みには、以前からミニバスケの講習会の講師として遠い先の種をまいたものです。しかしそのまいた種が大きく成長し、中学校チームへ発展し、S.61、H.3、H.5のインターハイ出場の1メンバーとなり活躍してくれた。この道

長いことやったお陰で、教え子の教え子や、我が娘の教え子にも出会い、みんな何等かの連がりを受けていることに幸せを感じています。戦力アップに優れた素材の部員を何人か迎え、地元の中学校からまいした種の成長を預かりながら、ここまで上位維持を続けられたのは、やはり学校あげての協力、父母の会の力、そして若い指導者が時間の許す限り教えこむ情熱あつてのことです。毎日、何とかチームにムード、勢いを取り込んで、明るく充実した高校生活だったという選手作りに、余念がありません。個人がいくら頑張っても、ムードや勢いにはなりません。戦力的には低レベルでしたが、全国大会出場がやはり勢いの始まりだったのではないのでしょうか。

こうして選手作りというのは、コーチが手作りで作るものだということはお互い承知のとおりだが、それだけでいい選手ができるものではありません。技術を救えたり、選手に気合いをかけたりにしているだけでは半分どころだと思ふ。選手を取り巻く環境、否応なしに頑張らざるを得ない雰囲気作り、気持ち良く頑張ろうというモチベーションを作ることこの部分が監督、コーチのもう一つの仕事と思ふ。この雰囲気作りが我チームの味つけとなると思ふ。もう一つ、公立高校における部活指導には、卒業後の進路へのアドバイスや相談役も大きな役割です。好きなバスケットは続けたい、そして将来の夢もかなえたい。現代っ子のお付き合いも、この長い教職生活の体験の中から、予期しないブランド志向の発想にも驚かされながら笑顔で聞いてやることですね。

以上は、微力ながら私の辿ってきたこの道の体験記にすぎません。これまでに寄せていただいた皆様の暖かいお付き合いに感謝し、若い先生方の今後の活躍を期待して止みません。投稿の機会を与えていただきましたことに厚くお礼を申し上げます。

高体連機関誌「南風」第7号（H5年4月）、第10号（H6年4月）、第11号（H6年9月）、第12号（H7年1月）に掲載。
登場人物の肩書き等は、掲載当時のものです。